



左から：秋山優子、寺田範雄、藤田一枝、田中美千代の各氏

全国で花開く創業支援助成事業

全国商工会女性部連合会の「女性の創業等支援助成金」制度は、創設以来五年が経過し、助成を受けて始めた事業が全国各地で花開いている。この制度は、全国組織化三五周年記念事業の一環として全女連が実施した「愛の100円玉募金」で集まったお金の一部を基金にして

創設されたものだ。これまで助成を受けた事業の中から、三グループの代表者に集まっていたいただき、寺田範雄全連専務理事をコーディネーターに、助成金を受けた経緯、その後の事業の進捗状況、地域に与えた影響などについて語っていただいた。

出席者

藤田一枝（新潟県清里商工会女性部）

田中美千代（京都府宇治田原商工会女性部）

秋山優子（千葉県栄町商工会女性部）

コーディネーター

寺田範雄（全国商工会連合会専務理事）

寺田 本日、お集まりいただいた皆様は、「女性の創業等支援助成金」制度が発足して最初の三年間に助成を受け、すでに事業を軌道に乗せている方々です。まず、ご自身の商売の内容、所属する商工会女性部の概要について、自己紹介を含めて簡単をお願いします。

藤田 新潟県上越市清里区で、製造業と福祉事業を運営しており、製造業は「株式会社藤翔」で電子工學材料の組み立て検査を行っています。二〇年前に内職から会社を興し、現在は二六〇名の社員が働いています。会社は今長男に任せて、私は会長を務めています。

福祉事業では、認知症対応型共同生活介護施設（グループホーム）「癒しの家」を五カ所運営する有限会社藤田企画の代表取締役と、特定非営利活動法人（NPO）「癒しの家」の理事長を務めています。グループホームでは、認知症の高齢者六九

名をお預かりし、社員七五名でお世話しています。NPOの「癒しの家」は、主に地域の福祉や福祉関連の講演会、NPO団体へのボランティアなどの事業を行っています。

清里区は人口三〇〇〇人余りですが、自然豊かな丘陵地にあります。平成三年に、清里商工会の女性部に入会しました。商工会の会員数は八一名、そのうち女性部員は一八名で、独居生活の高齢者を慰問したり、お祭りでの即売会、花いっぱい運動などを通じて地域との連携を図っています。

特産品の宇治茶を原料にお香を製造

田中 宇治田原町は京都の南部に位置し、人口は一万人程度の町です。商工会の会員数は三五〇名で、女性部に名を連ねているのは九五名ですが、実際に活動しているのは二、三〇名です。家業は小売酒屋で、現在三代目です。

宇治田原というと、宇治茶の産地で、日本有数の茶どころとして知られています。日本緑茶の発祥の地でもあるんですね。八代將軍徳川吉宗のころに、宇治田原で生まれた永谷宗円という人が、色も赤黒く、味も香りもお粗末なお茶を緑色にするための製造方法を開発しました。女性部では、緑茶発祥の地である宇治田原町を全国にPRしたいということで、お茶を原料にしたお香づくりに挑戦しました。

秋山 千葉県印旛郡栄町で、鳶土工事業を営んでいます。従業員は一五名で、昭和五十六年に法人化し、平成八年に代表取締役になりました。

栄町は千葉県の北部に位置し、人口二万五〇〇〇人程度。町内に龍角寺、大鷲神社などがあり、伝統に色づく町です。商工会女性部は創立一九九年目を迎え、会員二一名、賛助会員二名の少人数で運営しています。

寺田 次に創業等支援助成金の対象になった事業の中身について伺います。どのようなきっかけで事業に取り組まれたのかお話しください。

グループホームで認知症の高齢者を介護



藤田 なぜ介護施設かというと、私が二六歳のときに夫が倒れまして、夫と子供を養うために弱電の内職を始めました。睡眠時間が四時間しか取れないぐらい、生きていくために必死になって働きました。後に内職の人たちを集めて家内工業を興し、その仕事ぶりが地元の大手企業に認められ、会社を興すことができました。福祉事業に力を注

ぐきっかけとなったのは、仕事が忙しくて夫を十分看病することができなかつたことから、自分でも何かできることはないかと模索を積み重ね、平成十三年にNPO法人としては新潟県で初めて承認を受け、清里でグループホームを開設することができました。

グループホームは、認知症の人が日常生活を家庭的な環境の中で、専属職員の介護を受けながら生活する共同住宅です。すべての施設の従業員が個人の尊厳を大切にして、思いやりのある愛情のこもった介護の提供を心がけています。大切な親御さんのお世話をさせていただいている以上、正確な記録や文書を残すため、二年半かけてISO9001・2000の認証を取得しました。

寺田 近代的な経営手法を福祉事業に導入されているのは、まさにエレクトロニクス関係の経営で培った発想が生きているわけですね。それでは、田中さん、秋山さん、続けてお願いします。

田中 宇治田原町には、「茶文化が息づく、和みのまち宇治田原」というキャッチフレーズがありま



藤田一枝さん

す。四年前に町おこし事業の一環として、町の特産品を使って新しい商品を開発しようということで、女性部が開発に着手しました。

町の特産品というと、なんとといってもお茶ですが、なかなかよいアイデアが浮かびませんでした。最初、お茶を使った化粧水を試みたのですが、薬事法の壁に突き当たり、断念しました。次に食べ物考えたのですが、製造、販売するとなると部員の負担が大きすぎるので諦めました。そこで、お茶のさわやかな香りに着目して、緑茶の香りがあるお香を作ろうということになりました。

お香づくりのノウハウがまったくありませんので、お茶の産地の淡路島に出かけて勉強したのですが、結局自分たちの手で作るのには難しいことがわかり、メーカーに製造してもらうことになりました。どうぞお願いしますなら、「京都の老舗」ということで、松栄堂さんに宇治田原茶を二〇%含んださわやかな甘い緑茶の香りがするお香を作っていただきました。

松栄堂さんからは、「これは宇治田原の香りですから、他の業者が作ってほしいといっても作りませんし、自分の店でも売りません」との言葉をいただきました。宇治田原だけのオリジナルお香が誕生しました。製品の名前は、緑茶の製造方法を開発した永谷宗円の名前を使わせていただき、「宗圓香」としました。

伝説の「龍」をキャラクター化し、まちおこし



秋山 栄町商工会では、町の資源である龍や鷲、

古墳、それに特産品のイチゴ、米などを使い、町の活性化に取り組むことになりました。アンケートの結果、龍が一番多かったので、龍を使ったキャラクターを作ることになりました。町民からキャラクターの愛称を募集し、一六〇〇点の中から「ドラム」と名づけました。

龍の「ドラゴン」と、「夢」(ドリーム)の合成語で、町民に夢や未来を与えるという意味が込められています。ドラムは町のキャラクターとして循環バスの側面に描かれたり、町の広報誌にも使われています。また、平成十四年には、町が「ドラムの里」という観光拠点としての役割を果たす施設を作りました。

栄町は団地ができ、旧住民と新住民が半々です。なので、住む人がもつと自分の町を知り、もつと好きになってもらうことが町の活性化につながるということで、女性部はキャラクター事業を立ち上げたのです。

寺田 実際に事業を立ち上げてはみたものの、うまくいかなかったことはありませんでしたか。ま



秋山優子さん

た、助成金はどのように活用されたのですか。

田中 実は、お香にたどり着くまでは、この事業を何度もやめようと思いました。また、お香も原料にお茶の葉を入れると火が点きにくくなるのです。そんなこともあり、完成までには多くの苦労がありました。ですが、でき上がったからは比較的とんとん拍子でした。

助成金は、商工会の催しなどで販売するための職やチラシの制作に活用しました。また、若い人向きのお香の開発や、お香の箱のデザインにも使わせてもらいました。お香は地元テレビや新聞にも取り上げられ、拡販につながっています。

秋山 私が委員をしている千葉県連の「女性部地域自慢・発掘認定事業委員会」で、創業支援助成金のお話を伺い、助成金を使って「ドラム」のキャラクター活用事業を行い、町の活性化につながることにしたのです。「一人ぼっちのドラムに家族をつくろう」をテーマに、ドラムファミリーのストーリー募集やデザイン化、ドラムグッズの制作を考えました。

事業を行うに当たり、住民を巻き込んで展開したかったので、商工会会員、商工会会長、女性部、一般住民、行政、オブザーバーとして中小企業診断士の一三名で「ドラムのキャラクター活用委員会」を立ち上げました。そこで検討した結果、町の人たちに栄町に伝わる印旛沼龍伝説を知ってもらうため、紙芝居を作ることになりました。

印旛沼龍伝説のストーリーは、キャラクター活用事業の一人が作ってくれました。紙芝居の絵は息子が通う中学校の美術部の生徒に描いてもらい、

紙芝居の箱は女性部員の手作りです。印旛沼龍伝説の紙芝居を持って、地元の小中学校八校や老人施設を回りました。住民を巻き込んだ「キャラクター事業の展開」という当初の願望はある程度達成できたのではないのでしょうか。

企画の段階で委員の間で意見の相違があり、何度か衝突がありました。このぶつかり合いがあったからこそ、よい結果につながったのだと思っています。「ドラム・ファミリー」のストーリー募集では、応募が九〇件以上あり、地元の小学校の生徒と先生が書いた作品が最優秀賞に選ばれました。

このストーリーを小冊子にまとめ、小学校や中学校などに配布すると同時に、「ドラムの里」で一〇〇円で販売しています。助成金は小冊子の制作や賞品の購入等に活用しました。

創業支援助成金で施設に融雪パイプを敷設

藤田 NPOの承認に関することや、福祉事業の開始手続きについては、初めてのこともあり、どこから始めたらいのかわかりませんでした。くじけそうになったことが何度もありましたが、「お父ちゃんを何とか近くに呼び寄せたい」という一念で頑張りました。建物は会長をしている会社からの工面で何とかりましたが、NPOには銀行はお金を貸してくれませんので、資金面で苦労しました。

清里は日本でも有数の豪雪地帯で、融雪のために井戸を掘りたいと商工会に相談したら、助成金のお話をお聞きしました。さっそく申し込み、

助成を受けることができました。施設の周りに消雪パイプを敷設して、井戸水をくみ上げ、パイプでその水をまき、雪を溶かすのです。井戸の水が温かいので、雪が簡単に溶け、雪かきをしないで済むようになりました。助成金は消雪パイプの設置費用の一部に使わせていただきました。従業員への雪かきの負担が少なくなり、その分、利用者へのサービス向上につながりました。

寺田 取り組んでいる事業が地域でどのような評価を得ているのか、今後どのように発展させていく計画なのか、お話しいただけますか。

秋山 創業等支援助成金をいただかないと、ドラムグズ事業は展開できませんでした。十七年度は、ネットワークラップを作りました。役員などにも売り込んでいます。キャラクター事業を通じて、他のブロックの人たちとの交流も図れ、お互いに切磋琢磨できたことは大きな成果だと思っています。紙芝居でいろいろなところを訪問したおかげで、地元テレビや新聞に取り上げられ、町のPRにも役立つのではないかと思います。

事業を通じて、商工会女性部が一つにまとまった感じがします。事業を拡大するため、町の商店にネットワークラップなどのドラムグズを置いてもらうことも検討中です。

藤田 助成金を使わせていただき、冬が来ても除雪の心配が少なくなり、非常に助かっております。助成金を受けて設置したということが、事業が全女性連から認められという証になり、利用者や家族の皆さん、ボランティアの人たちから、高い評価をいただいていると思います。また、地域の中



田中美千代さん

でも「私たちも頑張れば助成金を受けられる」という励みにもなっていることと思います。

平成十八年の法改正で、グループホームは地域密着型サービスに位置づけられましたので、利用者と地域、施設と地域とのつながりも大事になっています。支援していただくだけの一方通行ではなく、積極的に地域の中に発信していかなくてはならない。高齢社会を迎え、地域の人たちと、よい関係を保っていくことが大事だと思っています。

お茶の香りに乗せて
緑茶発祥の町をPR

田中 一三センチの長い線香タイプと、新たに七センチの短いタイプのお香ができ、バリエーションが広がりました。また、平成十八年には宇治田原町の五〇周年に合わせて、お茶の香りがする「しおり」を作りました。町から、そのしおりを五〇周年の記念誌に挿入することを約束していただいています。

さらに、前女性部長が「飲むお茶から、香りを

聞くお茶」を開発し、町の活性化に貢献したとして宇治田原町から表彰を受けました。事業を通じ、女性部が活躍している姿を見てもらえることができ、自信にもなりました。現在、商標登録も申請中です。

ある日、新聞にご縁をいただいた松栄堂さんの家訓が載っているのを偶然見つけました。それは、「線香のように、くすくすとくすぶれ。小さな火だが常にくすぶり続けて、細く長くあらゆる方向に香煙を延ばしていれば、いろいろな人と交われる」というものでした。私たち商工会女性部も、細くても長く、「宗圓香」のさわやかなお茶の香りに乗せて、緑茶発祥の地・宇治田原町をいつまでも全国にPRしていけたらと思っています。

寺田 全国連では二〇〇六年度から、「地域資源全国展開プロジェクト」事業に取り組んでいます。地域資源を活用して新しい製品を開発し、日本全国に売り込んでいく事業を支援するものですが、お茶のお香についても、女性部だけの活動にとどめず、全国に拡大して行ってほしいですね。

せっかくの機会ですので、参加されている女性部に対してご意見があればお願いします。

藤田 女性部の行事に参加させていただく中で、「グループホームってなあに？ NPO法人ってなあに？」「それじゃ家に来てグループホームを見てください」というお話になり、女性部の研修の一環として、私たちのグループホームを見学していただいています。また、近隣の商工会からも見学していただいています。これからも、われわれの仕事が地域のためにお役に立てればと思ってい



寺田 範雄 全国連専務理事

ます。

本日の座談会で皆さんのお話を聞きまして、清里商工会女性部ももう少し積極的に活動していかなくてはいけないのではないかと感じました。

寺田 今後、高齢者支援は商工会活動の大きな柱の一つになってくるのではないかと思います。ぜひ、藤田さんにはこれまでの事業での経験から、商工会がこれから高齢者問題にどう関わっていかばよいのか、一つのモデルを示していただけたいと思います。それでは、田中さん、お願いします。

田中 商品ができるまでは、試行錯誤の連続でした。試行錯誤する間に、皆が仲良くなれたのだと思います。最初は五人とか六人の集まりでしたが、何回も集会を重ねていくうちに、徐々に参加者も増え、コミュニケーションもとれるようになっていきました。子育てしながら、仕事をもちながら、家庭を守ると同じ境遇の中で、皆が自然と集まるようになり、悩みも話し合える間柄になってきました。この事業を通じて「女性部の和やかさ」という大きな財産を得たと思います。この雰囲気

を次の世代につなげていきたい。

町の人たちが私の顔を見ると、「線香か」とよく言われるんですね。それくらい、宇治田原町の女性部というと「宗圓香」という感じになってきましたので、もうひと頑張りしたいと思います。

寺田 女性部の部長の立場からの心強いお話をありがとうございます。具体的な活動を通じて、組織の結束に結びつけることができたということだと思います。それでは、秋山さんお願いします。

親睦団体から、収益を生む団体に 変身した女性部

秋山 今までは親睦的な集まりでしたが、今回の一連の活動を通じて、「自分たちもやればできるんだ」という自信につながったのではないのでしょうか。「女性の創業支援助成金」をいただくことで、私たちでも小さいですが、収益を生む事業ができたということが大きかった。また、町の人たちと一丸となって、町の活性化につなげることができ、町民と商工会が一層親密になったのではないのでしょうか。

商工会女性部に入って、いろいろな人との出会いがありました。その出会いが、勉強にもなりましたし、財産になりました。倒産したり、廃業したり、高齢化が進んだりで部員が減少し、活動する人が限られているということが女性部の大きな悩みです。本業を持って、主婦業、母親業もして、その中から時間をやり繰りして活動をするということは大変なことです。しかし、そのやり繰りした時間が、人生の中で自分自身の形成に非常に役

立ったと思うのです。

寺田 最後に、これから創業を目指す女性部員に対して、メッセージをお願いします。

藤田 私は一昨年、脳梗塞で倒れ、病院生活を余儀なくされました。倒れたときも病院のベッドの中で、五つ目の施設を作るまでは、「倒れていられない」と自分を奮い立たせてきました。新たな事業にチャレンジする場合には、目標を持って、自分を信じて、自分の目で、足で確かめることが大事です。方向を誤らないためにも、周囲の人からも助言をいただいて実行すればきっとよい結果が出ると思います。

田中 はじめは何をどうしたらよいのか見当がつかせませんでした。ひたすら一生懸命目標に向かって取り組んできました。でも、辛抱を重ねて頑張っても、できないときは何をしてもできません。一度立ち止まって自分たちの立場を見つめ直し、そして再度挑戦するという姿勢も必要ではないでしょうか。新しい事業にチャレンジされる方は、持ち前の女性パワーをフルに発揮し、常に目標に向かって頑張ってくださいね。

秋山 まず、自分の町を知ることです。そして方向が決まったら、チャレンジすること、楽しく活動すること、諦めないで継続することです。それは、自分にも絶えず言い聞かせていることなんです。皆さん頑張ってください。

寺田 全国の女性部の人たちに励みになる話をいただき、ありがとうございます。ぜひ、事業をさらに伸ばし、全国から高く評価されるよう頑張ってくださいと思います。